滞日外国人の風景構成法と描画後質問にあらわれる文化的象徴

ー母国からの移住経験のある滞日日系ブラジル人の事例からー

○谷ラファエル大輝・＃谷渕真也・尾上絢音・進藤奈瑞菜・＃鈴木愛理
(香川大学大学院医学系研究科)

問題と目的

日本では労働力不足を背景に外国人受け入れが進み，在留外国人数が過去最多となった。定住化の進行に伴い，外国人本人や家族への心理的支援の重要性が高まる一方，多言語対応体制は十分ではなく，心理的ニーズが表出しにくい状況がある (安, 2020)。こうした課題に対し，風景構成法 (以下, LMT) は言語に依存しにくく，描き手の内的世界や文化的背景が表れやすい技法として注目されている。本研究では，ブラジルからの移住を経験した一事例を取り上げ，風景と語りに表れた適応の様相を検討する。

方法

対象者　ブラジルから日本への移住経験を持つ日系ブラジル人 3 名 (男性 2 名，女性 1 名)。

手続き　対面で個別に LMT と描画後質問 (以下, PDI; 中野, 2023) を実施した。その前後に半構造化面接を実施した。質問項目は以下の通り。(a) 属性：性別，年齢，日本へ移住した年齢，移住した動機，自覚している文化的ルーツ, (b) ブラジル文化と日本文化への適応 (Berry, 1992) に関する質問, 2 件法, (c) 描画アイテムや風景について文化の視点から尋ねる質問。本研究は，香川大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した (2025-154)。

結果と考察

対象者の属性　A: 60 代女性, 30 代で日本に定住するつもりで来日。自覚ルーツはブラジルだが，現在は日本という感じもある。異文化適応は統合型。B: 60 代男性, 20 代で日本の建築のノウハウを学ぶためデカセギで来日。自覚ルーツは日本。異文化適応は統合型。C: 60 代男性, 20 代でデカセギで来日。自覚ルーツは「だいたい日本」。異文化適応は，同化型 (ただし，ブラジル文化については「わからない」)。

描画中と PDI での発言は「」，半構造化面接での発言は『』で示した。

A の事例の概要　描画中は幼少期の記憶を呟きながら描いていた。道の描画で動揺がみられ，何度か描線を延長した。PDI では，山から流れてきた水が川を辿り，田んぼに行くと説明し，「ちょっと道が悩んじゃった」と語った。川・道，家・木・人，石はブラジルのもの，山はブラジルと日本が混ざっていて，田，花・動物は日本のものであった。

A の事例の考察　中心で折れ曲がった道と日本とブラジルのアイテムが混在する構成，川の水が田に流れ込む関係から，文化的アイデンティティの葛藤と変化のプロセスが表現された。

B の事例の概要　描画中は言葉を発さず，前のめりだった。PDI では，「キャンプに行った時に見る風景」と風景の詳細を語った。『風景はほぼ日本だが，道だけはブラジル』と話し，日本への肯定的な気持ちや体験が饒舌に語られた。

B の事例の考察　広大な日本の原風景を横切るようにブラジルの道が引かれている描画からは，日本文化に同化しつつも越境の記憶を保ちながら生きる自己のあり方が表現された。

C の事例の概要　描画中は「絵は下手」と気にしながら，アイテムを並べて描いた。PDI では,「田んぼは休んでおり，人は nada してる (何もしていない)」と説明した。川・田，花・動物・石は日本のもので，特に動物は『飼っている猫』と詳細に語った。山・道，家・木・人はブラジルのもので,『道はどこへ行ってもいい道』と語った。

C の事例の考察　アイテム間の関係は薄いが，個々のアイテムにストーリーや特徴が語られた。ブラジル文化のことを分からない，だいたい日本という異文化適応のあり方が,“今・ここで”に向き合う生き方の表れであることが読み取れた。

日本とブラジルのアイテムが共存する各 LMT には，ブラジル文化と日本文化をどのように自己の一部として位置づけているかが表現された。とくに「道」は 3 事例ともブラジル文化のアイテムであり，その描画と語りには，異文化適応のプロセスが表れていた。今後，外国人の異文化適応を捉える指標として, LMT の描画と PDI を活用できる可能性が示唆された。